

# 弔辞

中里喜昭

山田かん。

きみを過去形で語らねばならなくなつてから、すでにもう六十時間が過ぎました。相槌ひとつ聞けるでもなく、こうして独りで一方的にしゃべることが、しんじつ虚しく思えます。

病を得て一年経つたころ、きみはこんな詩を書いています。

森の小径で息を切らして

ぼくは淡い影をひいて

ついに來ることのなかつた

夢想の時代のままに

多喜二のことも忘れられた

自己愛と皇国理念の感傷

濁るばかりの水河期だ

つみ上げる嘆きの日々

星の腫瘤影は空を動かない

——『長崎碇泊所にて』所収「転形期Ⅱ」

自分を蝕む病気の影に重ねて、濁るばかりの水河期を——現代

をまじろがず見ている。年をとると、一日一日の暮しがだんだん重たくなります。生きてはたらこうとする思想に、体のほうがついていかない。その体に合わせて、思考の振り幅も狭めていく。それがふつうです。だが、きみはそうしなかつた。

きみが息を引きとる十時間前に、私たちは少し話をしました。

前日に、有事関連三法が国会を通り、国民総動員体制が法的に整つたことを話題にしました。過去をなぞつてまた暗い道へ踏みこむのか、否か。歴史はいま大きな転回点にきています。きみは先の詩のように、はらはらするようなほんとのことを、けつして飾らない言葉でそのまま言つてしまふ恐ろしい詩人でした。

地球環境の汚染、民族・宗教間の紛争、戦争による殺人や破壊、食糧不足と人口拡大、そして、それらすべてから生み出されるおびただしい難民。どれ一つとして、人類の危機に直結していない危機はなく、危機のさなかにある人間がこれほど生々しくみえている時代もあります。核の危機もまた、被爆直後とはちがひ、これら錯綜するいくつも・いくつもの危機の複合として表われているところに現在の特徴があります。

おれはもう、原爆は書かん、ときみは最後に言いました。それはしかし、生涯もち続けてきた反核の志を、このとききみが抛つたということではありません。これは、八月になれば、あるいは八月にならなければ原爆を思い出さない、一部マスコミの報道姿勢や底の浅いカンパニアの需めのまま、「反原爆詩」を書いたり「被爆詩人」を演じたりしたくない、というつよい批判から出た言葉です。原爆を体験したきみには、あの大量殺人装置を生きている者の頭上から投げ落とす行動こそ、人間にあつてはならない、

とする思想があり、それはきみの最期までつらぬかれていました。原爆が破壊したものと同じ深み・広がり、本気になって向き合えないと、原爆とはたかええないぞ、というのが、きみが生命の極限で発したメッセージです。最後の詩集『長崎碇泊所』にもそのメッセージは通底し、同時に、原爆を告発するのと同じ熱さで、いま人類を覆うかざかずの複合された危機を、現実のもつ深さで見渡しているきみの思想の広がりも読みとれます。

きみは、妻である和子さんのことを、他にたいしては「家人」といういささか古い言葉で呼んでいました。しかし、山田家の「家長」は、繊細で暖かい夫であり、ときに鋭いおやじであり、心こまかな父であり、孫にはまったく無防備なあまい祖父でありました。「草土」二十八号に充ちている主題は、孫を包む家族です。文字を一行書くにもいちいち消耗していた体力に合わせ、短歌や俳句の伝統詩形ならった、短句とよぶ表現形式まで自ら編み出しました。短句に描かれているほとんどの、まだ幼い孫たちへのおもいです。病苦が日に日に耐えがたくなるほど、小さい人たちのいとしさも濃くなりまざっていったであろう。孫をもつ私には、そこへかけるきみのおもいも痛いほどわかります。

濁るばかりの水河期の中にあつて、ほんとのことを飾りなく言

うのは、きみが演技下手でシャイだという性格上の問題ではありません。それは何よりもまず勇気をともなう行動です。きみには、それこそかけがえない、自分のいのちをかけて守るべきものがあつた。自分が慈しむ者へのつよいおもいがあつてこそ、きみは自分のひそかな怯みさえ抑え、濁った水河へ踏み出す勇気を得ていました。

山田かん。

私はきみにここで別れの挨拶をしたつもりはありません。あとで牧師さんに叱られるのを覚悟で言う、やすらかに眠ってくれ、とも頼んではない。病苦を肉体ごと脱ぎ捨てたきみは、澄明な志だけの姿で、君が遺してくれた多くの著作の中に息づいています。それこそコンバクコノヨニトドマリテ、きみは、きみの愛した者たちの裡に遍在してほしい。私たちと、ともに生き続けていてほしい、そう私は願っています。

二〇〇三年六月十日

中里喜昭